

毎月一回15日発行 昭和47年12月15日発行・第37号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

12月号



Libertaire VoL. W, No1

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年 九月 四月第三種郵便物認可
昭和四十七年十二月十五日発行第三十七号

定価一〇〇円(送料共)

目次

労働者の運動実践の 立場から主張する	布留川 信	1
岩佐作太郎論ノート	夕起 竜也	3
戦後の思い出	杉 藤 二 郎	7
デッチアゲに思う	ハ ギ シ ン	13
野 火		14

労働者の運動実践の立場から主張する

布留川 信

マルクス主義といえば反資本主義で、革命思想だと思
っている人が、世の中には、たくさんいるようでありま
すが、マルクス主義は資本主義を母体とした資本主義文
化で、真の自由文化とはいえません。この点において今
日、理論を重視する人間とマルキストとは、その根底に
おいて一脈相通ずるものがあると思います。もちろん、
理論を尊重する人間がマルキストだということではあり
ませんが、多分に科学文明を誇る資本主義文化に毒され
た人間だと思えます。

私はあくまで人間として自由に生きるためには、自分
自身として、岩佐さんの山賊論を単なる労働運動否定論
として受け取ることではできませんでした。「人は欲する
ものを信ず」ということを言いますが、私はここに理論
的な人間と、いつも実践的立場におかれている労働者の
相違があると思います。私たち労働者は、岩佐の山賊論
の中に読みとるものを、岩佐のうちに見いだすのではな
く、むしろ私たち自身のうちに見いだすのであります。

最近、私は一つの不思議な論理に接しました。それは
労働運動が衰微したのは、アナキストが労働運動を否定
したからだというのであります。アナキストは岩佐さん
の山賊論を否定論とは見ないで、むしろ積極的肯定論で
あると理解するのですから、この論理は大変おかしいと
思いました。

第二回全国自連の大会が、階級斗争主義を綱領に掲げ
るか掲げないかで討議中、サンジカリスト派の退場を契
機として事実上の分裂となり、以来、労働運動は衰退を
たどったのであります。そして、かれらは、この衰退の
事実を捉え、それを理由として階級斗争主義に反対した
アナキストは一運動をしなくなったから否定論者である
。否定論者であるから運動をしないのである」と結論
するのであります。つまりアナキストだけが労働
運動をしなくなったというのでしょう。

それまでの労働運動はサンジカリストとアナキストの
緊密な一体となつての活発な協力的運動であつたのであ

ります。ところが階級斗争主義を争点として、ここに初めて両者の区別がハッキリ浮き彫りにされたと同時に、労働運動の衰退となったのであります。何事も理論的でないければ承知のできない人間でも、この事実だけは曲げることができないであろう。

私自身の体験からすれば、アナキストとサンジカリストが自由連合的に協力して運動を進めてこそ、アナルコ・サンジカリストであり、また、それがアナルコ・サンジカリズム運動というべきであらうと思います。アナルコ・サンジカリズムとは思想や理論として定義されるべき問題ではなく、むしろ実際運動として発展させるべき問題であつたのであります。

この意味では、第二回全国自連の分裂以後、日本にはいわゆる山賊論的労働運動はあつたかもしれないが、アナルコ・サンジカリズム運動はあり得ないと思います。同様に幻想的なアナキストばかりの労働運動などあり得るはずはありません。また、もし、分裂後の衰退がアナキストだけの責任だとするならば、分裂前の活発な運動もまた、アナキストだけによつて推進されたものといわなければならないことになります。したがつてサ

ンジカリストは分裂後はいうまでもなく、分裂前も何ら労働運動に寄与しなかつたという意外な結論になりはしないだらうか。このように、サンジカリストとアナキストの切つても切れぬ関係のあるところにアナルコ・サンジカリズム運動がある以上、アナキストやアナキズム思想を誹謗するところにアナルコ・サンジカリズムは絶対にあり得ない亡霊に過ぎないことを知るべきだと思います。

しかるに、かれらは、この労働運動の衰退という一方的な外面的事実だけを理由としてアナキストは労働運動の否定論者であると独断するのであります。これがまた、労働運動についてのかれらの歴史の書き方であります。今まで、歴史として書かれたものだけをとつてみれば、まことにその通りで、それが何んぞ怪しまれずに当然なことのように通つています。しかし一歩退いて外部に現われた諸結果の背後にひそむ真の理由を知るならば、その歴史なるものが、いかに不合理であり、いかに空虚なものであるかが暴露されるものであります。たとえアナキストに過去においていかに間違つた行動があつたにせよ、何十年も経つた今日、なお自らがそこにどまり、不断に自由と創造を求めてやまぬ人間としてのアナキ

ストを理解しないばかりか、誹謗さえして、永遠に伝わるべき歴史の上に間違つたことを書き残すということは、自からの人間不在を暴露するもので、結局アナキズムの歴史と称しながらアナキズム抹殺の歴史とならざるを得ないであろう。

実践のために理論の重要なことはいうまでもないが、あまり理論、理論といつて皮相的ともいふべき外面的事実のみ囚われると、理論としての山賊論を、そのまま行動面の否定論として受けとる過ちを犯すことにもなり、

岩佐作太郎論ノート (一)

(一)

岩佐作太郎と言っても、今日、彼について知るものはまれであり、彼に何等かの重要性を置くものは誰れ一人としていないにちがいない。アナキズム運動史に通曉している人ならば、労働組合山賊論Vあるいは純正アナキズムVの唱導者として記憶しているだらう。たしかに彼は日本の社会主義運動史上で占めている位置は幸徳秋水、大杉栄という二つの巨大な星とは比較すべもない単に脚注に記される程度の存在でしかない。またアナキズ

ひいては理論がなければ一歩も歩けないマルキストと同様にもなりかねないことになります。このような理論偏重というマルクス主義的思想傾向こそ、アナキズムのガンであります。

いま岩佐さんの関係とともに、その思想まで抹殺されようとしています。日本のアナキズム運動の沈滞は「岩佐否定」によるものであります。岩佐が理解されないうちは、日本のアナキズム運動の復活はあり得ないといつても決して過言ではないと思います。

夕 起 竜 也

ム運動史の系列では克服されるべき誤つた理論の唱導者、運動を衰退させた元凶という悪役の座を与えられているのみである。

岩佐作太郎がこのように社会主義運動、思想史上で軽視されるのは、彼が幸徳や、大杉などのアナキストのように当時の思想界に多大の影響を及ぼしたこともなく決して主流となつたことがない事実からして当然のことと言えよう。彼の影響範囲はあくまでもアナキズムという

狭い囲いの中のことであったが、しかしアナキズム運動思想史上においてもいまだしかるべき座が与えられておらず、不遇のうちに留め置かれていたのである。

しかし、このように軽視され受容されないからと言って彼の思想が取るに足らぬ考慮に値しない内実しか有していないということの意味はしない。もしそうであるとしたら、なぜ彼の主張がかくまで假借ない偽造と歪曲に会わなければならないのだらうか？

彼の主張が安易に曲解され、軽視されたりするのは、彼がほかの著名なアナキストと異ってマラテスタのような行動家であって、自らの思想体系を構築する作業を怠って浩かな著作を表していないのでさらに彼の言動が最も作用を及ぼした時期が日本のアナキズム運動が衰微期にさしかかっていたという、これら二つの原因によるものと思われる。たしかに彼の著作活動はその長い運動歴からすれば、まことに僅少である。その著作の多くがパンフレットで、また翻訳もクロボトキンの二、三の著作があるのみで、ほかに断片的な自叙伝、回想録、二、三の機関紙、雑誌に掲載した論文があるのみである。彼の思想が最もよくまとめられているのはパンフレットだが、わずかに六冊である。試みに掲げてみると、「小作人に訴う」「俺達と政治」「無政府主義者はこう答える」

「革命断想」「国家論大綱」「労働運動と大衆運動」のみである。しかもほとんどが思想論というよりも運動論がその内容なのである。

このような事実がこれまでの彼に対する興味、研究の姿勢の多くが、その思想を対象にするよりも行動、すなわち運動史上のエピソードの視点からのみ取り扱はれ思想を本格的な研究・論議の対象とし、その主張の中に重要性を見い出して肯定的に評価する作業がほとんどなされなかった原因なのである。

※ ※ ※

岩佐作太郎は昭和四十二年二月十日、すなわち六年前に雪の降りしける厳寒の中を郷里千葉県の片田舎の陋屋で死の床に臥した。享年実に八十八であった。彼は明治・大正・昭和と半世紀以上もアナキズム運動に捧げ尽した、彼の長い生涯の軌跡そのものが黎明期から衰微にいたる日本のアナキズム運動の明暗を象徴しており、またその活動の幅は日本のみにとどまらずアメリカ・中国大陸にまでおよんでおり、これらの事実だけでも彼を研究の対象とするに十分なのである。

彼は大逆事件の報を聞くや一日日本天皇及び属僚諸卿に与ふ」という烈々たる文字を連ねた抗議文を遠くアメリカから当時の日本の支配者に送っている、日本の社会主

義運動、無政府主義運動の数少ない先駆者の一人であり、しかし当時の大部分のこれらのバイオニアとは相異して日本の現実から遊離した他在の思想に拝跪・依拠することを嫌悪し、翻訳的思想に追従することを拒否して自らの内から発酵し、成熟した思想を育くむべく努力し、深く日本の土壌に根を下した、すなわち大杉栄死後のアナキズム運動衰微の時期、のちに純正アナキズムと称されることになるクロボトキンと安藤良益の思想を融合して日本の現実に適応し、開花された著しく権藤成卿の思想と類似した農本主義的アナキズムとも言うべき日本・アナキズムの創始者であった。

このように傑出した特異的なアナキストであっても、彼の思想の意義を理解し、正当な評価を与え、アナキズム運動・思想史の系列の中で彼の果した業績をせん明にする作業は今日にいたってもなされていない。かえって、彼とは敵対的立場にある批評家の先入観と無理解によって過少評価されているのである。

たとえばこれまで岩佐作太郎およびその思想的潮流に関して下されてきた評価がどのようなものであるか、その代表的例をここに掲げてみることにしよう。

大沢正道は人右派クロボトキン主義と規定して、次のように要約、評価している。

一 右派は「純正アナキズム」とも自称し、クロボトキン主義の正統をもって任じていたが、じっさいはテロリズムの遺産である略取主義が加味されており、クロボトキン主義の保守的なところをそっくりそのままうけついでいるような側面もあった。

一 この派はサンフランシスコ福音会の指導者であった岩佐作太郎（略）や、教師出身の八太舟三、墨色青年連盟というアナキズム団体を大正末期に組織し、指導した前田淳一、菊岡行利らに代表されるが、その特徴は徹底した反マルクス主義で、階級闘争を権力闘争と理解してその革命的意義を認めず、組織活動は権力をともなうという理由でこれを否定し、労働組合は資本家との商取引機関にすぎないとして、アナルコ・サンジカリズムに正面から対立し、直接行動と称してしばしば暴力行為にでることがあった。

一 しかし、右派クロボトキン主義は現存のあらゆる革命的行動を摘発し、けちをつけるが、それにかわるべき積極的な、建設的な理論が運動をうちだすことができず、そのため民衆からうきあがり、ともすれば一人よがりの説教主義やたんなる町の正義派的運動におちいりがちで、大きな力とならなかったのみか、アナキズム運動全体を混乱させ、内部崩壊にみちびくという不幸な役

割をはたした。(大沢正道著「アナキズム思想史」)

このような見解が岩佐作太郎等の思想潮流に関する典型的評価なのである。

大沢の評価は、単にアナルコ・サンジカリズムの立場に立っての批判であって、無前提的にアナルコ・サンジカリズムの意義をせん明にせず、またそれが戦前の日本においてどのような役割を果たしたのか、という問題を回避して、非アナルコ・サンジカリズム的思想は誤謬であり、克服すべきものとしているのである。このような安易な独断的 条約発想からは純正アナキズムVが出現した要因、そして昭和初期のアナキズムがなぜ内部崩壊し、純正アナキズムを主張する部分から超国家主義へ移行したりあるいはアナルコ・サンジカリズムの立場に立脚する分子らがレーニズムへ近接した部分が存在したのかを、解明しえないのである。ましてや、黎明期から現在にいたるまで内在している日本のアナキズムの頗行の性格、弱点を看取しえないのである。

これまで二、三の批評家によってなされて来たように岩佐作太郎の思想が、単にA反サンジカリズムVあるいはAリヤク屋の思想Vではない。表層のみ眼を奪われ、そのような現象を呈示せざるを得なかった内部の矛盾、欠陥を見逃している。この点に関して同じ批判者でアナ

ルコ・サンジカリズムの立場からの評価では、秋山清の「転向」に関しての論文がより深層にまでついているが、しかし不十分なるものである。

ところで、岩佐作太郎の思想の意義を明確にする手懸りは、どこにあるのであろうか？ 判沢弘は「日本アナキズムの特殊性」と題した論文で次のように。

「では明治以来の日本アナキズムの思想および運動において、欠陥ないし弱点と考えられるものは何か？ いまそれを簡単にいえば、(1)伝統的思想との断絶 (2)宗教的心情の排除 (3)個人主義的アナキズムの未成熟の三点に要約される」(「評点」一九一七年五月一日号)と、三つの特殊性をあげている。この判決の指摘は的確である。岩佐作太郎及び純正アナキズムVはこのうちの第一点の問題にも由来するのである。すなわち伝統的思想との断絶。

そして、判沢は次のようににつづける。

「明治維新以来の欧化政策の反映として、体制批判の思想としての社会主義もアナキズムの思想も欧米出来の思想そのもの移植であって、土着の自立、自由の思想、権力否定の思想と結びつくことなしに発したところにその後この思想が深く日本の現実社会に根をおろすことができなかった」

岩佐作太郎が問題にしたのはこの点なのである。思想というものは自らの現実から湧出するものであって、それが他在の権威に依拠するかぎりその内実は空虚なものとなってしまう、それゆえ何等の有効性を持ちえないのである。それゆえ彼がかたくなまでにペダンティズムを嫌悪し、幸徳や大杉のように西洋の新思想の紹介者、バ

イオニアとしての役割を果たすこともしないで、日本の底辺からアナキズムを創始しようとしたのである。

岩佐作太郎の思想すなわちA純正アナキズムVとは、

戦後の思い出 7

書き残したこと

戦後のインフレ景気は、労働者の賃金ベースアップ運動となり、全国あらゆる産業の労働者は、ストライキを含む闘争に明け暮れた。吉隈炭坑も常時緊急状態で、労働者は資本家側と接渉を持ち、賃金ベースアップ、福祉厚生施設の改善を闘い取って行ったが、残念ながら、ベースアップより物価の上昇の方が先行することは、現在と同じである。私の組合長時代には幸か不幸かストライキはさけることが出来た。

杉 藤 二 郎

それゆえ単にヨーロッパの意味における運動論の一種ではなく、それは技術論を超えたより深い問題を内在しているのである。もし単に運動論上の問題であるならば、彼の主張は皮相的な「労働組合否定論」ではない。それは彼の論文を読めば、明らかである。マラテスタの主張とほとんど判りがないのだから。

岩佐作太郎の思想を分析、検討することはこれまで看過されて来た問題点、弱点を 抉し、せん明にすることだろう。

前記のように、私の炭坑在住期間は、五年にすぎなかったが、時機が終戦直後のことではあるし、次々につき当る問題は山積していた。外地よりの引揚者、戦災者について、炭坑とて他地方に比し、例外ではない。時々、町役場を通じ、彼等に対する物資の配給が行われたが、その配分は、非常に不合理なものであった。大まかな比率ではあるが、当時、町内の引揚者、戦災者の比率は、引揚者20%、戦災者80%で、それに対する物資の配給は、引揚者へ60%、戦災者へ40%であった。数字の上でも大

きな聞きだが、実際に品物が動いてみると、戦災者がいかに冷遇されているか、実感される。私は、引揚者も戦災者も敗戦による痛手は同格で、もし多少とも国の援助があるとすれば、一律に受けるべきものだったのだ。町役場に抗議することにした。引揚者、戦災者からの代表各一名、それに矢野書記長を加えて、共々、町長に面会を求めた。役場の言い分は、こうであった。

「引揚者は、ほとんどが裸一貫、命からがら帰国したのだが、戦災者の被害程度には個人差があり、無一物の人は少い。」

これが、全く憶測による、みみっちい考えであることは、今思いかえしてもおかしい程だが、役場吏員のこの「理由」とするところを、くつがえすことは、私等が数回足を運び、物資配給に立合うという条件を、吞ませた上で、やっと実現したのだった。

その頃、三井、三菱、住友など、所謂大手筋の炭坑では、すでに保養施設、福祉厚生施設など備っていたが、地方大手と言われる、麻生のような、大人数をかゝえた炭坑でも、予防医学的厚生施設は何もなかった。麻生健康保険組合は、結成していたが、治療医学に重点がおかれ、その他の福祉厚生には、まだ手がつかなかったのである。私は労働組合長を辞めるとすぐに、皆の要望で、

浅草区長 須田銓造 図
援護会長弔慰金五〇円交付ス
本所区役所

百姓家の食客

ふとした縁で農家の娘と結婚し、桂子を連れて農家入りすることになる。その家は、代々の地付きで、妻の父はすでに死亡、母が農業を営みながら子供を育てた。戦前の所有田畑は終戦後の農地解放で大部分を小作人に取られ、残った一町歩余りを細々と耕作していた。母の里も近在の地主で、こうした処に、娘婿が子持ちで入り込んだのだから、注視的になるのは当然だった。村人の噂に耐えて私を理解し、病弱の身をいたわってくれた家の人や、縁者の方々に守られて、私は自由な日を送るようになった。だからと言って私は毎日遊んで居たわけではない。自分の出来る範囲の手伝いをした。たとえば出荷する野菜を洗ったり束ねたり、時には田圃へリヤカーを引いて行ったり、そのうち次第に百姓仕事にも慣れていった。雨の日など手伝う仕事もないので、何か自分で出来る事を考えた末、筵^{フシ}や呌^{カサ}を造ることにした。

呌作りと自由共産新聞

一九五一年（昭和二十六年）昼は筵と呌作り、夜は新聞

労働者代表理事を務めることになった。これをきっかけに、かねがね懸案の託児所、海浜保養所、洗濯屋、美容院、理容院などの設置運動にとりかゝった。先ず炭住を借受け、クリーニング屋、時計屋、美容院、理容院などを組合管理下に置いて、いくらかでも組合員の経費を軽くするようにした。

次に、健康運営協議会へ保養所設置を提案して、玄海灘に面した、津屋崎という海岸に、従業員の保養所を設けることに成功した。

当時、私が持っていた罹災証明を参考までに写しておく。ワラ半紙8分の1に左のように謄写版で刷っている。

証明願

東京都浅草区山谷一ノ一番地
(家族) 名 氏名

右者昭和二十年三月九日ノ空襲ニ罹災セル事ヲ御証明相成度及御願候也
氏名

東京都浅草区長殿

右証明候也

昭和二十年九月十九日

の原稿書きと、大体の構想を決めて初めたが、米を入れる呌を作ることは容易でなかった。筵も呌も藁を機械で織るのだが、織上げた後の仕事が大変である。呌の場合規格があっても薄くても厚くてもいけない。また陽に干して磨をかけつやを出すという作業もある。私のやさしい手では手が荒れるわりに、金もうけにならない。こんな事では将来性が無いと見切をつけ、三ヶ月余りで、十万円もかけた機械類一式を、四万円の捨値で売却した。

その頃、家の入口に「自由共産新聞」の看板を掛け、ガリ版刷りで月刊紙を出した。この新聞は7号で終るが、福岡の連中も、副島が東京から帰り、井原、小副川の三人で、博多人形製作を軌道に乗せ、動き出した。

ガリ版平民新聞

東京から一年振りで帰った副島が、私のガリ版刷りの新聞を見て、平民新聞をガリ版で出そうと意気込み、その年の十二月十五日より、月三回刊の平民新聞が発刊される。

一号から二十二号まで杉藤、二十三号から三十二号山口健二、三十三号から四十三号杉藤、四十四号から五〇号副島と、ガリ切から印刷、発送まで各自一人で行ったものである。ガリ版で新聞大の四頁を刷ることは、一まわり大きい自作の謄写版でも骨の折れる仕事だった。当

時の私は、病弱ながら氣力が満ちあふれていたから出来たものと思う。私は、新聞の他に、ガリ版でパンフレットも発行した。

主なものは、M・L・ベルネリ著、大沢訳の「スターリン、ロシアの労働者」△フィリップ・サムソン著、大沢訳「サンジカリズム」(後日、大阪自由市民社から活字で再版)△ビーター・ブランド著、副島訳「自由への道」である。当時のアナキスト連盟には、機関紙を発行する資力に乏しく、それに輪をかける意見の不一致など、空白沈滞の時期だったので、私のガリ版は、多くの同志から激励を受けたものだ。しかし、残念ながら、激励だけで出版活動が出来るものではない。出版には、金と労力と原稿を必要とする。この三者が、どれ一つ欠けても長続きしない。原稿は、近憲、久保、大門、山鹿、大沢各氏の協力で大丈夫だった。中でも近憲さんの日本アナキズム運動史は注目を引いた。金は博多の連中が、何とか工面してくれた。然し、労力は、私が病身で、療養所や病院を出たり入ったりで、定期出版も狂いがちとなった。今一つ、ガリ版を切るには或程度の技術を要した。力を適当に根気良く切った原紙は、刷り上げて読み易いが、原紙切りがまずいと紙面も見ずらく、立派な原稿も死んでしまう。ひいては読者にも影響する。今から思

うと、私は若い人を後継者として育てていく上に、包容力に欠けて居たことを反省している。折角の新聞を、あの程度に終らせてしまったのも、責任の一端は私自身にあるのではないか。

伊串英二と山口健二

一九五二年(昭和二十七年)田植の頃であった。伊串英二が私の処で一週間暮したことがある。彼は私の顔を見るなり、仲間の悪口を並べ出した。相手に言葉を差しはさませぬ早口である。私は伊串の言葉を聞いている中に、彼を快く迎えてくれなかった人を、悪し様に言っているのだなあと気づいた。彼は、人が迷惑しようがしまいが、問題でなく、自分勝手な生き方をする男だった。他人の家にさっさと上り込み、自分本意に振舞う点など、一般人には狂気の沙汰である。私もちょっとたまげたが、それでも義母のすゝめで客間へ通し、ほどほどに合槌を打った。私の処は翌日からの田植で、人の出入りもあり、私も伊串だけにかまって居られず、その旨、伊串に話して、毎日田圃へ出た。五日ぐらい経った頃、部落の人々のグチが私の耳へ入るようになった。それによると、『本家の婿さんのお友達だそうだから、いくら忙しくても、話しかけられれば、知らん顔で突っぱねる訳にもいかんし……』

のは、残念である。

教育委員の公選

田植時は、部落総出の共同作業で、人手の少ない家は、山向うから雇ってでも人数を揃える、所謂猫の手を借り度い時である。そんな時に手伝いをする意志もなく出入り人や田圃で働いている人をつかまえ、長話をされては、誰しも迷惑なことだ。いくら私がお人よしであっても、これ以上居てもらうわけにはいかないので、八日目に、旅費と弁当を渡し出してもらった。これがオールドの見本では困ると思った。

その年の秋、山口健二が来て二日ばかり居た。彼は血のメーデーで暴れ、うまく逃れ出て検束を免れ、全国の同志宅を転々と渡り歩いてた。彼は副島の処から私の方に廻って来たのだが、私のガリ版印刷に感銘を受けたらしく、自分から買って出て、二十三号からガリ切り、印刷、発行をするようになった。しかし、結果的には専念出来ず、三十三号から又、私が引受けねばならなかった。

誰しもそうであるが、若い時は自分の行動が絶体であり、経験者の意見など耳に入らぬものだ。年配者は年甲斐もなく腹を立てることもあるが、若い人が時の流れと共に大きく育ってくれる事は何よりもうれしい。山口君にしても一夜を共にすることさえ浅からぬ縁と思うが、その後、葉書一本の便りもなく、消息も聞かなくなった

この年は秋から冬にかけて、電産スト、炭労ストと長期に亘る基幹産業のストライキが横行する一方、権力者は破壊活動防止法を作って、労働者を不当に圧迫する。警察予備隊が保安隊(今日自衛隊の前身)に組織変えして、次第に軍国調を整えて行く。その中で町村に教育委員会の設置を見ることがなり、初めての公選が行われる。私の住む穂波村(翌年町制施行)も、ボス共を抱き込んで、炭坑の医師を委員候補に押し立て、現職の中学校教諭らがメガホンを持ち、自転車に乗って村中を馳せ廻り叫んで歩く。村民には教育委員がどの様な役目かも知解らない。走り回る運動員の顔によって一票が動く。私は或日の夜、公民館で行われた推薦演説会で、教育委員に立候補している増田と言う医者に、教育行政の構想を質問した。その回答は、私の質問とは凡そ縁遠く、彼自身教育委員の成すべき役目を知っては居なかった。当時の候補者は大同小異、大体そんなものであった。真に教育行政の改善を意図するものは、立候補すること自態晴れがましい思いで名乗り出なかった。何時の時代でも大衆が選び出すというのではなく、僅かな数の権力者によって政治は行われる。私は公民館で発言以来『飯塚の共産党』

と蔭口をされるようになった。その頃は、全国至る処でレットバースにあった連中が訴訟を起し、裁判闘争が行われ、三鷹・松川事件も尾を引いていた。改革論や新しい構想の発言者は総て『アカ』のレットテルを貼られ、就職も出来ず生活に苦しんだものである。私も農家の入口に『自由共産新聞』とか、『平民新聞社』の看板を掲げ、サンドウィッチャン姿で街へ出たり、博多の副島や井原も又同じ姿で私の処に出入りする。世間は、アカ、クロの見別けがつかず総称して『アカ』だと言うのである。私はそんなことにかまわず、自分の出来る範囲で農作業を手伝っていた。さすがに妻の母は、「家の周囲だけは、看板（サンドウィッチ姿）を取って歩いてつかせ。」と言うので、それ以来私は母の言葉を守った。

駐在員、部落長、公民館長

私は二月と言う月に興味を持つ。炭坑の組合長に選ばれたのも一九四七年二月。一九五三年（昭和二十八年）二月、部落のボスが、私の処へ来て、駐在員をしてくれと言う。駐在員というのは、都市に於ける町内会長の如きもので、役場の通達事項を部落内へ知らせたり、転出入の証明書を発行したりする、役場の出先機関であり小使である。部落内の家族名簿を持ち、出産・死亡等の届出にも駐在員の印がいる。役場から、受持戸数によって、

わずかながら毎月の手当が出る。まあ一種の名譽職である。本来公選によるべき性質のものであろうが、当秋松部落は昔から名門がこの職を受継いで来た。今までこの役目を受持っていた人が、家庭の事情で役目を辞任したので、部落の顧問格が話合って、後任者には私が適任だと決めたい。私も定職がある身ではないし、月々にいくらかの収入も得られるので引受けることにした。翌三月には、公民館長の改選が行われ、選挙で私が選ばれ、私は実質的な部落長になった。部落の人々は本家の婿と言う以外何も知らず「赤」と言う噂も次第に消え、私を部落の指導者として立ててくれるようになった。私も又、公民館長として新時代の氣風を吹き込むことに努めた。これは権力行使ではなく、教育の分野である。『あきまつ』という公民館報を自費出版し、部落に於ける封建制打破に努力した。

つゞく

訂正

九州地協の活動記事中、小副川の名が出て来るが、これは筆者の錯覚で、彼は当時西新町雲月堂で、博多人形を共同で作っていたので、我々の会議の折二、三回同席したが、活動面には加わっていない。元九州地協のメンバーにあらためてお詫びする。